

バーナード・マラマッドの世界観 ——『神の恩寵』の試み

大 場 昌 子

1982年に出版され、作者バーナード・マラマッド (Bernard Malamud) の最後の完成作品となった『神の恩寵』 (*God's Grace*) は、核戦争により大洪水が起こり、全人類が減びるところから始まる。主人公カルヴィン・コーン (Calvin Cohn) は人類ただ一人の生き残りとして登場する。有史以前の古遺物研究者である彼は「破壊の日」を海底探査船の船内で体験し、その後水面に浮上したときの様子は次のように描かれる。

空は灰と炎の反射とでどんよりしていた。海には浮いた魚と動物の死骸が帯状にぎっしり連なっていた。死んだ魚の臭いがコーンを襲ったとき、彼はついに何が起きたのかを知った。彼はむかむかする恐怖と、吐き気を催させる人類の恥辱を感じた。多数の鋼鉄のミサイルが海底に突っ込み、湯気を上げる排泄物のようにそこにあった。(16)

第1章が「洪水」と題され、主人公コーン自身が神に対して「『世界を破壊する洪水は二度と起こらない』と、ノアと生き残った生きものすべてに汝は契約された」(12)と訴えるように、この部分は旧約聖書の中でノアが箱舟を作って生き延びる大洪水になぞらえた「第二の洪水」として説明される。アラン・レルチャク (Alan Lelchuk) が本作品を「マラマッドの新しい聖書」(ニューヨークタイムズ紙、1982年8月29日)と呼び、ピーター・フリーズ (Peter Freese) もまた「皮肉に逆転された『創世記』の改作」(165)と呼ぶように、『神の恩寵』は人類の原初の物語を下敷きにした作品である。

一方、灰と炎と死臭に満ちたこの状況は 20 世紀に実際に起きた惨劇ホロコーストをも想起させる。作者マラマッドがユダヤ系アメリカ人である事実にあえて言及しなくとも、主人公コーンの父親も祖父もユダヤ教の^{ラビ}聖職者であったこと、コーンが「神はトーラー [ユダヤ教の律法] である」と思い出す場面 (88) など、コーンがユダヤ人であることが作品の基盤となっているため、この作品とホロコーストとの関わりは無視できない。

ユダヤ系アメリカ人作家は、第二次世界大戦中ヒトラー率いるナチスによって行われたユダヤ人大量虐殺の事実を、様々な形で作品に投影してきたが、この点についてピーター・ノヴィック (Peter Novick) は、ヴェトナム戦争の場合と比較して興味深い指摘をしている。

ヴェトナム戦争に関する観客動員数の多い映画やベストセラーの本は、ほぼ戦争が終わって 5 年から 10 年以内に登場した (後略)。しかしホロコーストに関してはそのリズムはひどく異なっていて、第二次世界大戦終結後も 20 年ほどはほとんど話題に上らなかった。そして 1970 年代以降、時を経るごとにますますアメリカの表立った言説の中心に位置するようになり、むしろユダヤ人の間ではとくにだが、アメリカ文化全体としてもそうになっている。(474)

アメリカ社会においてホロコーストに関する言説が登場するまでに長い年月を要した理由には複雑な要素が絡んでいるだろうが、ここでは「第二の洪水」が二つの民族間の「水素爆弾による戦争」によって引き起こされたと設定されている点に注目したい。『タイム』誌の書評は「1958 年にマラマッドは、アルベール・カミュの言葉を引用して『作家の目的は文明がそれ自体を破壊させないようにすることである』と述べた。(中略) 彼の第 8 作が、1980 年代の人道主義者の中心的な関心事である核の黙示録を扱っていることは驚きではない」(1982 年 9 月 13 日) として、第二次世界大戦における米国の核兵器使用に始まり、冷戦下に大国が核実験を繰り返し、『神の恩寵』が構想された 70 年代、¹ 米ソの核兵器配備が加速し、人々が核戦争勃発の脅威に対する不安を増大させていた社会状況に言及している。

マラマッドは本作品以前に、『修理屋』(*The Fixer*, 1966)においてユダヤ人が帝政ロシアで迫害を受けて苦闘する姿を描き、この作品ですでにホロコーストを反映させていると考えられるが、マラマッドが現存する核の脅威と歴史的事実としてのホロコーストを重ね合わせた上で、聖書を下敷きにしたとみえる大胆な構図で『神の恩寵』を創作していることについて、以下考察していきたい。

主人公コーンは、「破壊の日」の惨状に接し、自分だけがただひとり生き残ったことについて「神が肉屋の帽子を被って、今にもドアをノックしようとしていることを恐れた」(19)と言う。さらには、彼が白い猿の夢を見たために恐怖に駆られて神に悪態をつく、天使のような声が聞こえてきてコーンをたしなめるが、その場面で「彼は神を愛する以上に恐れていた」(117)と告白している。そして彼の神に対する恐れは、やがて怒りへと変化する。コーンは「なぜ全能者は、つまるところ、もっとまじな仕事をしなかったのだろうか」(125)と創造主としての神の行いに疑問を呈する。また遡って、コーンと彼の父親は「ホロコースト後、深刻な問題を抱えた」(57)のであり、コーンは「彼の父親が破壊の日が来る前に亡くなったことに感謝」し、「なぜならこの大惨事に関して父親は神を赦さなかっただろうから」(57)と説明する。神を赦さないという激しい表現について、アーヴィング・H・ブーヘン (Irving H Buchen) は、「神と議論したり格闘したりするという概念を、マラマッドは、キリスト教には対応するものがない本質的にユダヤ人特有のものとして示している」(“Malamud's *God's Grace*”)と指摘しており、この指摘はコーンという人物の確固としたユダヤ性を裏付けるものである。「破壊の日の責任は誰にあるのか」という問いに由来する「怒りと哀しみを抑えられない」(118)コーンにとり、また神が「肉屋の帽子を被って」いる様を想像する彼にとっては、一人を残して全人類を葬り去った「破壊の日」の到来は、ヒトラーのユダヤ人大量殺戮になぞらえて、神により行われた人類のホロコーストともいえるかもしれ

ないのである。

しかし、この作品をホロコーストとユダヤ人という範疇でのみ捉えるわけにはいかない。コーンが生き残った船内には、飼い主がゴットローブ (Gottlob) と名付けた一匹のチンパンジーがいた。このチンパンジーは首から十字架を下げていて、のちにコーンと一緒に生活するようになると、飼い主から受けたキリスト教の教えを全面的に信じている事実が明らかになる。そしてこのチンパンジーは、雌のチンパンジーをめぐるコーンとの決定的な確執を経て、作品の最後でコーンを捕え、殺害しようとする。「破壊の日」の後も、宗教上の対立がコーンとチンパンジーによって引き継がれている形である。ところが、最後の場面でコーンに致命的な一撃を与えるのは、チンパンジーがコーンののどに向けたナイフではなく、「ナイフがコーンの身体に触れる一瞬前に、驚いたことに血が噴き出した」(201)のであり、神の行いであることが暗示される。つまり、コーンは同じく生き残った類人猿の手にかかって死ぬことを免れ、一人だけを生き残らせたという「取るに足らない間違い」(11)をした神が、最後の人類カルヴィン・コーンの命運を決したのである。この点をユダヤ人的観点から捉えれば、この場面を含む本作品最後の章が「神の慈悲」と名付けられているとおり、コーンは神より特別な配慮を与えられたと考えるのが自然だろう。しかし、この作品に核戦争の脅威という現代的テーマが盛り込まれていることを改めて思い出すとき、この結びの場面はまた別の解釈も可能になる。

ホロコーストの現場であるヨーロッパから地理的に距離を置くアメリカ社会で、年月を経てホロコーストが熱心に語られるようになった理由について、前出のノヴィックは、フランス人社会学者モーリス・アルブヴァクス (Maurice Halbwachs) の「^{コレクティヴ・メモリー}共同の記憶」という概念を提示しつつ一つの見解を示している。ノヴィックは次のように述べる。

米国におけるホロコーストの記憶を見るときに、アルブヴァクスの方法で記憶を最近の事件に関連付けていくと、(中略) ホロコーストの記

憶が迫る運命の変遷が、状況の変化や、とくにアメリカのユダヤ人の中で、集合的な自己理解や自己表現について彼らが下した結論の変化といかにかわっているか衝撃を受けるだろう。(476)

ノヴィックの議論は、あくまでアメリカ社会におけるホロコーストの取り上げられ方についての包括論だが、『神の恩寵』という作品自体がこの「共同の記憶」という概念と思いがけず結びついていることに気づかされる。

ここで、アルブヴァクスの「共同の記憶」について概観しておきたい。英語版『共同の記憶について』の訳者レイス・A・コーザー (Lewis A Coser) は、その序文の中でアルブヴァクスについて、「私たちの過去の問題は、私たちが現在の問題を解決するために用いる心象によって影響され、従って、共同の記憶とは本質的に現在という光の中で過去を再構築したものであると力説した初めての社会学者であった」(34)と紹介している。そのアルブヴァクスによれば、「過去を再現しているその瞬間ですら、私たちの想像力は現在の社会的環境の影響下にある」(49)のであり、また逆に社会は「人々に、人生で以前経験した出来事を心の中で再現するだけではなく、そうした出来事を呼び起こし、それらを短縮し、あるいはそれらを完成するという義務を負わせ、その結果として私たちは、どれほど自分の記憶の確かさを信じようとも、現実がもたない威光をそれらに与えるようになる」(51)という。すなわち、ある出来事についての記憶とは、その記憶を思い出す人々が属する社会が要請する形で保持され、そのようにして保持された記憶には「威光」が与えられるというのである。さらに「共同の記憶」は、「特定の集団においてもっとも重要な機能を果たす」(54)のであり、言い換えると、出来事は「私たちが私たちの集団内でそれらに付与する名前とそれらに帰する意味によって」(175)記憶されるのである。

以上を踏まえた上で、『神の恩寵』の内容に戻る。本作品は「洪水」、「コーンの島」、「スクールツリー」、「森の乙女」、「預言者の声」、「神の慈悲」の6章から成り立っている。海底探査中の船内にいて洪水を生き延び

たコーンは、チンパンジーとともに南洋の島に漂着する。「コーンの島」の章では、彼は居住空間にしたた洞窟とその近くに建てた小屋で「未来を引き受けているように」(36)生活し始める。まもなくコーンは高熱と嘔吐をとともう症状で倒れ、意識を失うが、何者かが彼を介抱し、回復する。その後、彼は次のような行動をとる。

コーンは 100 人のためにカディッシュを唱えた。荒波で壊れたリベカ Q 号から持ち出した、何度もめくってひどく傷んでいるマンハッタン区電話帳から、無作為に 100 人の名前を選んだのだった。彼はその電話帳にある種の「死者の書」として洞窟に一緒に置いておいた。(41)

カディッシュとはユダヤ教で親族の葬式の日から 11 ヶ月間毎日、または命日に唱えるアラム語の祈祷である。コーンはこれ以前に、ヘブライ語と英語で書かれた彼の古いトローラーが船内で濡れてしまったため日に干して手当をしているが(27)、彼がニューヨークの電話帳も持ち出し、ニューヨーク市民一般のために祈っていることは注目すべきである。そもそも電話の通じない海底の調査に赴いたコーンがなぜわざわざ電話帳を探査船に持ち込んだのかその行動は不可解だが、マンハッタン区の電話帳とは、言うまでもなく米国の金融の中心地で現実に生活する人々の住所を 1 冊に収めた共同体の名簿であり、その名簿が不自然な形で第二の洪水後のコーンとともにあることは、電話帳の存在が特別な意味を担うことを示唆する。電話帳から無作為に選んだ人々にカディッシュを唱える彼は、高度な文明を築き上げたホモ・サピエンスという動物の一つの類そのものを吊っているといえるだろう。

しかしながら、島で類人猿と「未来を生き始めた」はずのコーンは、人類の優越性への信奉を簡単に棄て去ることができない。とくに彼が人類の優越性を意識するのは、言語についてであることが、チンパンジーに次のように語っているところからわかる——「ともかく、人がより見事に、より巧妙に人になるのは、つまり感受性の鋭い、理にかなった、教養のある人間になるのは、言語をとおしてなのだ。人が、理解し、描写し、自身の体

験や抱負や性格を伝えることで他人に自分の心を打ち明けるときのように」(68)。だが、このチンパンジーには元の飼い主によって人口声帯が埋め込まれており、その上英語も教えられていてコーンと会話ができるため、「チンパンジーを忘れないで」(68)とすかさず言い返される。つまり、コーンの説く人類の優越性は言下に否定されているのである。

コーンが抱く言語にかかわる優越感、別の行為となつて現れる。彼は、島に名前を付けようと考え、案として「破壊された終わりの島」、「チンパン・ジー」を考えつくが、「結局『コーンの島』で我慢した」(47)という。「洪水」の章では、ともに生き残ったチンパンジーにゴットローブという名前が付けられていたことを知ったコーンが、「その名前が気に入らず」、トローラーを無作為に開いて見つけたバズ(Buz)——「家父長アブラハムの兄弟、ナホールの子孫のひとり」——という名前を付け直す(27)。チンパンジーは名前を変えられたことに「胸をたたいたり、飛び跳ねたりして息を荒げて抗議した」にもかかわらず、コーンはチンパンジーを改名した後、チンパンジーとは「固く結ばれた友だち、もしかすると兄弟のようにになれる気がした」(27)のだった。この二つの名付けの行為は、コーンがチンパンジーを支配しようとする意識を顕在化するが、名付けの行為はのちに一層深刻な対立をコーンとチンパンジーの関係に生じさせることになる。

「スクールツリー」の章で、コーンの島には新たに5頭のチンパンジーが生息していることがわかる。その結果、バズは5頭と一緒に島のどこかで過ごすようになり、コーンと洞窟で一緒にいる時間がひどく減る。そしてバズは、自分が5頭それぞれに名前を付けたとコーンに言い、その際「名前を付けることはだれも独占できない」(97)とコーンへの対抗意識をむき出しにする。これに対してコーンは、「名前を付けることはアダムを務めたし、この島では私の務めだ」(97-98)とあくまでも彼の支配権を主張する。

さらにバズは、新たに現れたチンパンジーに英語を教えたと言い、コーンは「圧倒されそうな高揚感」を感じながらも、「しかし発話のための器官

を持たないのに、どうやってチンパンジーたちは話せるのか」とバズに尋ねる(100)。するとバズは「彼らはぼくのようにはっきりした発音では話せないけど、彼らは信じる気持ちがあるから言語を習得したんだ。(中略)もしあんたに信じる気持ちがあれば彼らが話しているのを聞くことができるよ」とコーンに説明し、結局彼は「信じる気持ちがある、と謙虚に言った」(100)のだった。ここではバズが5頭のチンパンジーに人類の言語を教えたばかりでなく、コーンに対しても言語はあくまでコミュニケーションの意思があってこそ機能を発揮するという言語の本質を説いており、コーンが一方向的に人類の優越性を主張する態度に大きな疑問が呈されているといえる。

白い猿の出現により神への恐怖感を募らせたコーンは、「神を喜ばせるかもしれないのは、この島の猿たちの生活を、機能する社会的な共同生活、相互に影響し合う生活へと思慮をもって取り計らうことかもしれない。その際、自分は助言者兼保護者となって猿たちが自らを理解して社会の契約を果たすことを助けるのだ」(118)と考え、スクールツリーを作り、チンパンジーたちの教育を始める。やがて「森の乙女」の章ではまた新たに3頭のチンパンジーが現れ、コーンはモーセの十戒を言い換えて「コーンの勧め」と名付けた7項目の戒めを島の断崖の壁に掲げて共同生活の秩序を確立しようとし、そして「コーンの島」は繁栄する。彼のこうした一連の行動を可能にするのは、バズが新しい3頭にも英語を教えたからである。

ところが、コーンとチンパンジーたちとのコミュニケーションの実現に尽力したバズは、島でただ一頭の雌のチンパンジーに興味を持ち始めるが、その雌はコーンに興味を示すため、バズの欲求はコーンによって退けられる。生殖に関わるコーンのバズへの抑圧はバズの反抗心を煽り、次章「預言者の声」で突然8頭のヒヒが島に現れ、それまで保たれていた島の秩序が一挙に崩壊していく中、バズはコーンに対して巧妙に復讐を果たす。怒ったコーンはバズに「父を裏切ったのだからおまえを罰しなければならない」(193)と言い、バズが止めるよう懇願するにもかかわらず、人口声帯のコー

ドを切断して話せないようにしてしまう。すると、他のすべてのチンパンジーも英語を話さなくなり、コーンと猿たちの関係は即座に断絶する。

このように見てくると、作品の結末でコーンに訪れる悲劇は、コーンが人類としてチンパンジーに対して持ち続ける優越感に起因することが明らかであろう。他者への優越感、他者を支配する権利の主張へと展開し、結局コーンは自ら「コーンの島」と名付けたとおり、島の支配者であるべき自分の姿しか想像できなかったのである。これは、世界の覇権をめぐって核戦争に突入した人々の姿と何ら変わらない。

作品は、コーンの死後、1頭のゴリラが「カルヴィン・コーンのために長いカディッシュを唱え始めた」(201)ところで終わる。コーンが島に漂着してまもなく高熱と嘔吐で倒れたときに彼を介抱したのがこのゴリラで、時折コーンとチンパンジーたちとの共同生活に姿を現すものの、チンパンジーたちのように英語を話そうとしても「せき込んで、緊張し、ため息をつく」(114)ばかりで話すことはできず、またどこかへ去っていく。ただ、コーンの父親が吹き込んだカディッシュのレコードの音声をひどく気に入り、このゴリラはカディッシュを覚えたのだった。コーンがマンハッタン区の電話帳に記載された100人のためにカディッシュを唱える場面が、結末ではこのゴリラが人類最後の生き残りであるコーンのためにカディッシュを唱える場面へと受け継がれているのである。重要なのはこのゴリラが英語を話さないことであり、同じ言語を共有しないためコーンの支配はこのゴリラには及ばない。コーンの支配の圏外にいたゴリラがコーンを悼むところに、人類の犯した過ちを繰り返さないための鍵が見出せよう。

マラマッドが旧約聖書の語り直しともいえる形式で『神の恩寵』を創作しているのは、作品中ホロコーストはもちろん、ヒロシマにも言及があり(16)、そうした歴史的事実を核戦争の脅威にさらされている世界中の人々の「共同の記憶」として保持するために、ユダヤ人のみならず広く世界の人々に知られている原初の物語としての旧約聖書こそ、格好の枠組みであっ

たからと推察できよう。他者への支配欲が自らを滅亡に導くという『神の恩寵』の物語が、現代社会に生きる人々の「共同の記憶」となることを作者マラマッドは意図したのかもしれない。

注

1 フィリップ・デイヴィスによれば、「マラマッドはすでに1973年6月のストーリー・アイディアノートで、言葉を話す動物のストーリーというより大きく深い試みになるはずのファンタジーについて(中略)考えていた」(324)ということである。

引用文献

Blake, Patricia. "Genesis II." *Time* 13 Sep. 1982.

Buchen, Irving H. "Malamud's *God's Grace*." *Twentieth-Century Literary Criticism*.

Thomas J. Schoenberg and Lawrence U. Trudeau eds. Vol. 184. Detroit: Gale, 2007. N. pag.

Coser, Lewis A. Introduction. *On Collective Memory*.

Davis, Philip. *Bernard Malamud: A Writer's Life*. New York: Oxford UP, 2007.

Freese, Peter. "Surviving the End: Apocalypse, Evolution, and Entropy in Bernard Malamud, Kurt Vonnegut, and Thomas Pynchon." *Critique*, Spring 1995. 163–76.

Halbwachs, Maurice. *On Collective Memory*. Ed. and trans. Lewis A. Coser. Chicago: U of Chicago P, 1992.

Lelchuk, Alan. "Malamud's Dark Fable." *New York Times* 29 Aug. 1982.

Malamud, Bernard. *God's Grace*. New York: Penguin Books, 1983.

Novick, Peter. "The Holocaust in American Life." *The Holocaust: Theoretical Reading*.

Neil Levi and Michael Rothberg eds. New Brunswick: Rutgers UP, 2003. 474–79.